

今日における地域研究の意義*

— 主としてアメリカ研究について —

出口 泰 生**

1. Area Study の発達

第2次世界大戦いらい、アメリカにおける Area Study は、めざましい進歩をとげ、その地域研究の対象も、本国アメリカはもとより、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、ロシア、日本、中国、アラブ諸国等、世界の各地に及んでいる。地域研究というのは、簡単に言えば、その名のとおり一つの地域を対象にして、その地域の文化と社会とを、いろいろの学問の協力をえて、多角的、総合的に研究しようとするものである。むろんこのような研究方法は、アメリカで確立されたのであるが、当初は F.G. ターナー (Turner) などの歴史学者が、アメリカ史をさまざまな分野から総合的に研究し、あるいはパリントン (Parinton) などの文学者が、アメリカ文学を社会環境と結びつけて考察したのがはじまりである。

こうした学問の傾向は、19世紀末にもすでに芽ばえていたが、1920年に至ってはじめて実現されたといつてよい。つまりアメリカにおける Area Study の確立には、自国の文明に対する自覚が、大きな役割をなしているのである。これは第一次世界大戦後のアメリカに、自国の文明を再認識しようという動きに刺激されたのであるが、もう一つの大きな要因として上げられるのは、今世紀に入ってからの学問や文化の進歩は、極端にそれぞれの専門に分化しはじめる傾向を見せ、こうした細分化に対する反動として、学問の総合化ということが、大きなテーマとなってきたことによるのである。すなわち研究者は、極度に分化された自分の研究領域に閉じこもり、文化の全体像には無知の人間となってしまう危険性が存在している。

アメリカにおける、この地域研究は、30年の不況、さらに第二次世界大戦と、危機に直面するたびに、進歩してきたのは確かである。すなわち特に戦中から戦後にかけての発達は特筆するに値するものである。たとえばアメリカにおける日本研究は、1930年代に多くの日本学者

が輩出したのであるが、パウル・ハーバー以来、日本研究は国家的な要請となって、ハーバードやコロンビアなどをはじめとする各大学での日本研究の講座は拡充された。そしてこの研究を促進するために、また軍の諜報機関の人々のために、日本語研修所が設立され、短期間に日本語の「聞き、話し、読む」技能を徹底的に教育した。ドイツ研究も、大体同じようにしてはじめられた。むろん戦中の、Area Study としてのアメリカの日本研究は、軍事目的達成のための、情報を獲得することであったが、それ以前は殆んど文学や美術の研究が中心となっていたのに較られば、長足の進歩を見せたのである。とくにルース・ベネディクト (Ruth Benedict) の日本人の心理構造の分析は、いわゆる日本人の神風特攻精神の解明に、大きな役割をはたしたのはよく知られている。

アメリカのロシア研究は、やはり本格的には1946年以降にはじまったといつてよい。戦後の冷戦の激化が、これの研究をさらに活発にしたのも事実であった。まずロシア研究でも、他の地域研究と同じように、ロシア語の、super intensive course (超集中的講座) がもうけられ、まず研究者のこどばの壁がとりのぞかれた。そしてそれより以前に各大学ですでに始められていたロシア文学や政治、経済の研究者の協力をえて、アメリカ学術会議が中心となって、さらにこれにいくつかの財団が財政的援助をして、ロシア研究は、今日では各方面にわたって積極的な研究が進められている。

地域研究の目的は、さきにもふれたように、諸科学者が専門分化した今日、ある地域の人間社会を理解するために、関係諸科学を総合し、その社会、文化の全体像をとらえることにあるのである。しかし諸科学の総合のうえに成り立つといつても、その範囲は極めて広範にわたっている。社会学、政治学、経済学、人類学、文学、言語学、歴史学、地理学、心理学、宗教学、哲学、美術から、ある場合には地質学、植物学、気象学、イデオロギー論等々まで網羅されることがある。であるから、ある地域に関して、これだけの学者を動員して、研究計画を実行するには、かなり困難な問題も生じてくる。地域研究は、その発達の過程でふれたように、細分化しつつある現代

* The Significance of Today's Area Studies
—Chiefly on American Study—

** Yasuo Deguti

の諸科学を総合して、ある地域に関する、「広範囲な実用的価値のある知識を得ることである」ということにあるが、そのような実用的価値という表現には、ともすれば何か不純な目的を想像するのであるが、しかし今日のアメリカにおける、アジア研究学者の一人 J.H. ベイリー (Bailey) は、アメリカの大学におけるアジア研究の目的は、過去の教養教育が、全く西欧一辺倒であったから、ある場面ではそれよりも秀れているかもしれないアジアの伝統と文化に、アメリカ国民の目をむけさせることであり、ここから新しいアメリカ文化の創造をささげ、予想している点は記憶されねばならない。アメリカの Area Study は、戦争によって進学し、そして政府、学界や財界をあげての協力体制ができたのであり、戦争中の目的は、たしかに軍事情報を集めることにあったわけだが、今日ではこの若いアジア学者が言っているように、むしろ Area Study をとおしてそれぞれの文化の比較に、向かいつつあるのだと思う。

わが国でも、Area Study は高木八尺氏、中屋健一氏らによって、戦後に紹介されたが、その具体的なものは、東京大学教養学部の、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ学科の設立に見られるものである。しかしわが国ではまだ Area Study が、大きな成果をおさめたという例を見ない。後の章においてものべるが、今日 Area Study はわが国においても、とくに大学教育の場と、研究者の専門諸科学の細分化をたどる傾向から、是非ともこの確立が望まれるのである。

2. 文学の基礎研究と Area Study

今世紀のアメリカにおける文学研究と批評の分野で、奇妙にも対象的な方向が打ち出された感がある。それは文学研究としての地域研究の一派と、批評としてのニュー・クリティシズム一派である。地域研究の成立については、先にも述べたとおりであるが、ニュー・クリティシズムは、J.C. ランサム (Ransom) を中心に、アレン・テート (Allen Tate) R. P. ウォレン (Warren) クレアンズ・ブルックス (Cleanth Brooks) らが集って、1920年代にあらわれた。なぜここにニュー・クリティシズムをもち出したかという点、すくなくともこの派の批評家たちは、明らかに地域研究に対して、否定的な態度で出発したからである。むしろこれらの批評家たちは、海の彼方の英国において、新しい文学界の主流になりつつあった主知主義的批評家、T. E. ヒューム (Hulme) T. S. エリオット (Eliot) I. A. リチャーズ (Richards) ウィリアム・エンプソン (William Empson) 古くはまたクロッチェ (Crotche) の審美主義の立場などによって影響される

ところは、決して少なくなかったけれども、これらのアメリカの新批評の人たちは、やはりアメリカの文学研究者、批評家たちの傾向、すなわち 1920年代までの大勢を占めていた、社会的批評に対する反動が、主たる原因であった。これまでのアメリカの文学界の方向は、V. L. パリントン (Parington) を首領とする文学の社会学的研究ないしは批評が、盛んであって、文学をすべて社会現象の一産物とみなすテーヌ (Taine) の文学理論が支配的であった。先にものべたように、パリントンをはじめ、ハーバードでの T. S. エリオットの師であるアーヴィング・バビット (Irving Babbitt), V. W. ブルックス (Brooks) などの社会派が、いわば地域研究の母体になっているのであるが、これらの人々の考えに、新批評に拠った人々は、反対の文学理論を示したのである。

地域研究のなかでの、文学研究を考えるばあい、ここには言うまでもなく、文学作品はすべて、時代環境の産物であって、したがってその時代の社会状態、つまり経済学や社会学や政治学、また風土環境、地理学、歴史学、人類学、言語学 etc. こうした文化諸科学の援用なしには、文学それ自体の理解も、研究も成り立たないとされる。しかしこれに対して、こうした文学と社会の関係は、ニュー・クリティシズムの人たちには、いわば非本質的なものであり、もっと本質的に関連する、作品自体の価値を問おうとする。つまりイメージとか、リズムとか、神話、こうしたものが彼らの批評の命題になる。

地域研究とニュー・クリティシズムの方法が、一般的にいうと、前者が小説を、後者が詩を研究対象としているのは、興味ぶかい点である。そしてこのことはまた、小説と詩のあいだにある差異とでもいうべきものが暗示されている。小説は詩より遙かに社会的制約をうけ、社会を反影するものだからである。言語に例をもとめても、小説のことはば日常的な規範のうけにしか成立しないけれども、詩のことはばかならずしも、日常的な文法や語彙は必要とされない。であるから詩は、より個人的な想像力の産物だと言えるであろう。それはテーマや、素材についても言い得る。例えばエミリー・ディキンソン (Emily Dickenson) や E. A. ポオ (Poe) の詩は、社会的知識をもたなくても、読むことができる。これらの詩は、おおよそ、それ自体、自己目的的であり、美的価値を有しているからである。S. ラニア (Lanier) のごときは、これらの詩を、音楽と物理学の法則によって、一つの科学にささしやうとしている。

しかしながら、小説について言うならば、A. ポオの短篇小説ならば、社会環境の予備知識を無視しても、理解と鑑賞のマイナスにならないが、殆んどの小説について

て、それらを除いては理解と鑑賞は成立しない。ここに、ニュー・クリティシズムの一派が、ほとんど詩を対象とし、地域研究がより多く小説を対象としている理由がある。

しかしこのことは、一応の理由になるけれども、両者はそれぞれの欠点を有している。しかしニュー・クリティシズムが好んで対象とする詩のなかにも、たとえばカール・サンドバーグ (Carl Sandburg) の『シカゴ』Chicago のような詩集は、シカゴという社会の全体像を多方面から理解すれば、この詩の味わいは、さらに深いものになるにちがいない。だがさしあたって、この派の人たちの批評の対象は、あくまでも本質的な問題にある。今日の詩について言うことは、前世紀までの法則では、もはや今日の詩は理解されないということであり、その本質にかかるイメージの研究などは、非常に大切なものとなってくる。

たしかに現代詩は、社会的な広がりや喪失してきた。ということは、ことばとか詩のイメージが、社会一般の原因と結果の法則をまるで無視したものが、公然とはばをきかしている。そのかわり、詩のイメージは、それ独自の内的な意味で、結合し分裂し、ここからはおおよそ、地域研究が目的とするような、妥当性はなさそうにみえる。しかし実を言うと、ここに地域研究の見逃す危険性がある。今日では、いろいろの面で芸術作品は cosmopolitan になりつつあるが、詩のイメージやリズムや、それらの関連する現代の神話は、やはりある地域における、文化のもっとも根源的なものと考えられるのであって、これらの研究や考察なしには、地域研究はもっとも文化の Archtypal な面で、妥当性を失うことになるのではあるまいか。

すなわち、わたくしたちは新批評の人々の、文学に関する本質的研究は、Area Study にとっても、やはり看過されることがあってはならないと思う。なるほど彼らは、イメージとか、メタファーとか、シンボルとか、神話といった、形式、形態の解明に専念して、いわば文学の非本質的な、社会との関連性を遠ざける。

しかしこのように、文学の非本質研究にまったく背をむける、これら一派の研究は、実は地域研究のなかで、もっとも疎外されがちな、地域研究自体もっとも本質的に繫っているのである。ある地域研究に、もっとも重要な、そしてもっとも根源的なものは、やはりその地域におけるイメージとか神話であって、これらの研究なしには、その地域研究は、中心のないものになってしまうのではあるまいか。

現代詩に関してのべたいことはまたある種の小説にも

言いうるのである。今日小説と詩のあいだは、ある作家にとっては、ほとんど無にひとしいものになっているばかりが多いのであって、すなわち小説においても、その手法に関する、基礎的な研究は、前世紀のそれとは比較にならないほど、重要なものとなっている。たとえば W. フォークナー (Faulkner) の『エミリーの薔薇』の理解のためには、そのシンボルの解明が、必要である。そしてそれを解くためには、作品の行間に存在する人間的意義を見つけるための、基礎的な研究は実に大切なのである。Area Study は社会科学的には言うまでもなく、記録の記述が重視されるのは当然であるが、文学研究は単なる社会的な記録の記述ではないのであって、作品の象徴的な意味や、行間に潜在する人間的な意義の解明が、本来的なものであるからである。

地域研究のなかでの、文学研究には二つの役割が存在する。一つは文学研究をとおして、ある地域の社会様態を知る手がかりをつくることであり、他の一つはある地域の社会の、諸相を全体的にとらまえたうえで、そこにおける文学作品を理解する方法である。すなわちこれら二つの役割は、いわば両刃の剣である文学の本質的な研究が必要なものは、前者の研究の基盤となるべきものだからである。いままでのべたように、ニュー・クリティクの研究方法をとる学者、批評家などは、その非本質的なものを極力排除しようとするし、Area Study などは全く問題外であるとするかもしれない。しかし文学研究の最終の目的は、あくまで人間的意義の探求であることに変わりはないのであって、その研究が結果的に、Area Study に参加することに余儀なくされたとしても、それはその研究の価値が、低下するのでもなければ、また純粋性が失われるのでもない。つまりその研究のもつ、もっとも人間的な、本質的なものが、地域研究のために生かされるとしたならば、それはむしろ好ましい傾向でなければならぬ。それからまた後者の、社会学的な見地から、文学作品の研究をなすものは、それ自体ははじめから、地域研究のプログラムのなかで、充分にその役割を意識しているわけで、これの重要なことは今更繰り返すまでもない。ある地域研究に関する文学研究の方法として、たとえば政治的イデオロギーなどによって、その地域の文学が支配をうけているような場合には、言うまでもないことであるが、後者の社会学的研究法は、もっとも必要である。アメリカにおいても、ソヴィエト文学に関する研究では、やはり後者の研究法によって、数多くの興味ぶかい研究成果があがっている。

しかしいずれにしても、Area Study における文学研究は、この二つの方法が、必要とされるのであって、こ

の両者の結合のうえによりよい成果が、実ることは疑う余地がない。

Area Study における文学研究は、ある地域における文化の諸相を明らかにする一つの手段であるが、研究の積極的な面を強調するあまりに、文学の本質的な、基礎研究がおろそかにされることがあってはならない。しかしまた究極において、Area Study に参加しうるような、文学の基礎研究は、またそれ自体のなかに、じゅうぶん人間的な意味と内容をもったものでなければならぬし、またそこに地域的な問題性の意識が働いていることがのぞましいのである。しかし地域研究が進歩することによって受ける利益は、文学研究が、その実用的価値のために害されることが、多少あったとしても、むしろ文学研究が、その隣接諸科学の援助をえて、より内容をふかめることのできるばあいを予想することの方が、容易であると思う。社会の細分化が、ますます世界の方向として進めばすすむだけ、あるいはまた文学が政治や社会から切り離しては成立しがたくなる傾向が存するかぎり、地域研究とともに促進される文学研究は、より多くの成果をじゅうぶんに予測することができる。

3. Area Study と大学教育

地域研究は、研究それ自体の問題と、大学における教育プログラムの問題とに、分けて論ずるのが適当であると思われる。例えば地域研究としてのアメリカ研究を、大学の教育プログラムにどのように取り入れてゆくかは、今日当面の問題として重要である。

さきへのべたように、アメリカでは 1920 年代から自国の文明に対する、再認識を痛切に感ずるようになり、その教育プログラムが一般教育課程に生かされ、他方アメリカ文明学部 (The Department of American Civilization) の誕生となったのである。今日わが国の大学、文科系学部の当面する問題に、教育プログラムがある。東京大学はじめ他の諸大学でも、文学部の構造改革論が、しきりに論じられている。あまりにも急激に変化する社会の情勢に対応するには、旧来の文学科系学部、学科では、充分にその研究と教育の目的を達し得ないのである。この際、アメリカ研究をはじめとする、Area Study の考えを将来のプログラミングにおりこんで行くのが妥当ではないかと思われる。

現在の大学の文学部は、すでに時代から遅れた存在となりつつある。つまりそれは旧制大学から引き継いだ、学者養成的な教育課程なのである。しかし今日の四年制大学文学部で、将来学者となるために、大学院ドクター・コースに進む学生が、全体の何パーセントいるであろう

か。おそらくそれは 2 パーセントにも満たないものであろう。極端な言い方をすれば、僅か 2 パーセントの学生のために、あとの 98 パーセントの学生が、その目的に合わない教育をほどこされているのである。文学部の占める数的なパーセンテージは、四年制大学において、たしかに少ない数字ではないが、しかしわが国のように文化と教育の水準が高い国では、いわゆるマスコミ、あるいは教育、さらに貿易、サービス部門などにおいて、これらの学部の卒業生は、かなり必要とされるはずである。

しかしそれが旧来のままの教育をほどこされているところに問題がある。この問題の端緒は、いうまでもなく産業界から切られた。つまり英文科についていうならば、Shakespeare は研究しているが、日常英会話ができないような卒業生が大半だと言われる。一般社会の側では、英文科といえば、英語を学習しているのであるから、英会話はできるであろう、こう予測するのは当然である。これに対して、英会話は学問にあらず、しかして英会話は大学の英文科でやるべきものではないといった議論が聞かれたのである。こうした議論は、今日の四年制大学や二年制大学では成立しない。すなわち新制大学は、旧制のそのように学問のうん奥をきめる場所というよりは、もっと実的な価値に重きを置いて、設置されているはずである。すなわち今日の産業界や一般社会で要求しているような、技能と教養を、もっともっと重点的に習熟することがのぞましいはずである。(社会の側で求めているものにだけに答えるのが大学教育でないのはむろんのことである)

文学部の、たとえば英文学科に例をとるならば、いわゆる英文学プロパーの専門的な講座のみを配したのでは、さきへのべた一般社会の要求には答えられない。また今日の文学部志望の学生の質も、20 年、30 年前の学生のそれとは明確な差がある。すなわち以前文学部志望の学生は、いわば人間としてのアウトサイダー、あるいは性格破綻者——それに類するタイプの人たちが多かったのであるが、今日では女子学生が大半を占め、男子の学生にしても、昔のようなタイプの学生はごく少数になってきたし、実的な目的をもっている学生が、男女ともに圧倒的なものである。これが良かれ悪しかれ今日の傾向なのである。したがって、文学部の教育は、文学プロパーではなく、たとえば外国文学にせよ、国文学にせよ、もっと Area Study 的な教育プログラムが必要となって来ているのである。この考えは、さきへのべたように、アメリカにおいて発達してきたものであるが、ある地域の研究を、語学、文学を中心にして、更に隣接諸学科の協力のもとに、新しい内容をもりこむべきなのである。

さてわが国における外国文学研究の発達をかえりみると、当初はいわば、蘭学、英学、ないしは洋学と呼ばれていたように、文学研究が独立していなかった。たとえば英学の歴史をふり返ってみてもわかるのであるが、この学問は、極めて広範な領域にわたって、はじめられていたのである。そして明治の中期においてさえ、英語学者と、英文学者の区別は存在しなかったのである。しかるに、英学の発達とともに、語学と文学とは分化し、英文学者と英語学者の間にさえ、ある種の望ましくない境界さえ生じて来たのである。このような結果が、今日の大学教育において様々の矛盾を生んでいるのである。つまり外国文学科において、ごく少数の例外をのぞいては、むしろ外国語の習得そのものは読解力の養成を除いては、あまりかえりみられなくなってしまったのである。戦後いくぶんこのような傾向は、改善されてはきているけれども、その根本的な解決策はまだ見られない。

文学部において、Area Study を、それぞれの学科にとりいれてゆくためには、やはり語学と文学が中心となることには変りないであろう。そして言語学習の時間は、さらに intensive に実行されることがのぞましい。つまりその Area のことばの理解なしには、Area の文化研究は、成立しないからであり、アメリカの地域研究を見ても、ことばがまず集中的に訓練されている。さきにも少しふれたのであるが、戦後東京大学では四年制の教養学部が発足し、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス等の Area Study が行なわれているのであるが、例えばアメリカ学科を例にとれば、アメリカの歴史、政治、法律、社会、科学、文学のアメリカ関係学を中心に、東西の思想、比較文学、人類学、文学、美術などを基礎学として、さらに選択科目として言語、教育、マスコミ研究、貿易論などが加えられている。そして更に英語講読、作文、会話などの語学の時間が、かなりの比重を占めている。いうまでもなく、Area Study の基礎は、言語であるから、ある地域の言語の学習は、intensive なものでなければならない。しかしながら、このような Area Study は、教養学部の特殊性のうえに出来上るものであって、文学部の教育課程をこれと同一視することは困難であろう。しかしいわゆる文学プロパーではなく、やはり語学の intensive な学習と、広く文化諸科学の講座を網羅する必要がある。

今日文学部の構造上の問題点は、文学専門課程に偏していること。これはさきにも指摘したように、卒業生の過半数が、マスコミ、実務界などに出てゆく現状を考えると、英文科に関するばあい、英語国民の Area Study を無視しては、決して社会の要望するものに、答

えることができないのである。さらにまた文学研究の方法としても、Area Study としてのより広範な知識が、今日では要求されるのである。文学研究と Area Study との関連については、前の章でのべたとおりであるが、文学そのものの理解のためにも、従来のような文学史、作品研究、文芸思潮のカリキュラムに止まらず、それぞれの地域の社会、文化を、なるべく広範に、それぞれの言語を通して、考究されるならば、これはその文学そのものの理解もより深くなろうし、ひいてはその言語の習得に、役立つところも大きいのである。

Area Study は、基本的には総合学であり、その中心は社会科学系の分野の学問と考えられているが、大学の文学部で実施さるべき Area Study には、またそれ独自の教育プログラムがあってしかるべきである。すなわち文学部外国文学研究学科には、文学、語学を中心とした Area Study が存在し得るはずである。

すなわち文学部の学生が、いずれの文学を専攻するにしても、大切なことは、その文学の理解もさることながら、さらに広い意味での、その地域的な、社会と文化の背景を知ることであり、同時にそれらの学習と研究には、それぞれの地域の語学で、なされるべきだということである。そしてこのような点で地域研究を、文学部の教育プログラムに考慮してゆくならば、現在の一般社会で要望されている問題、語学力と、文学のみに偏しない学問と教養などが、解決されてゆくにちがいない。

4. あとがき

わが国におけるアメリカ研究、ないしは英学（むろん新しい学としての）は、地域研究の概念からすれば、まったく個々ばらばらに、それぞれの狭い研究領域内で、発達してきたのである。すなわち今日では英米語学者と英米文学者とのあいだの相互協力さえも、きわめて珍しいことなのであるから、英米史や英米社会学の研究者との総合研究などは、皆目、見あたらない。学問の専門的分化は、今後ますます進むであろうことは、充分に予想のできることであって、したがって、われわれがその危険性から脱するためには、地域研究によって、つねに学問の総合化につとめる以外に方法はない。しかしここで各研究分野の専門研究のもつ独自性の重要なことは、言うまでもないのである。地域研究は決して学問の各専門領域を無視するものではないし、文化諸科学の総合ということは、各学問の独自性をふまえて成り立つものだからである。

地域研究による教育上の問題は、主として文学部に限って論じたけれども、現実の問題としてこれは決して小

さくないのでって、関係諸学先輩の一考をわずらわし、また叱正と御批判を乞いたい。

出口泰生： 本学教授（英文学担当）